

『聖なる螺旋』

～循環的な存在についての瞑想～

緑豊かな庭園では、
花びら一枚一枚、葉一枚一枚、
花が朱色の舌を伸ばし、
雄蕊の金色の花糸を陽光に向かって持ち上げ、
雄しべは琥珀の祈りとなって立ちのぼる。

花の渴きは、水だけでは癒せない。
光を求めて花びらが開くとき、
燐光を放つ姿が現れる。

しかし、満開の花の燃える炎さえも、
重力の抱擁に身を委ねることになる。『
花びらは祈りを終えて舞い落ち、
私たちすべてを養う大地の子宮へと還らねばならない。
沈黙のささやきは生きた経典へと変貌する。

けれども、
朽ちは終焉ではなく、再生であり
崩壊は、深遠なる季節の瞑想に過ぎない。

こうして私たちは、神聖なる螺旋の中へと入ってゆく――
絶えず展開し、絶えず生成していく。

ミン: (詩を聞いたあとで、片方の口角を上げて) ひどいコンポストだ、バットマン!
この詩は植物学的なメランコリーだね! まるで花冠をかぶった弔辞じゃないか。
誰か、葬式みたいだって感じてない?

玲亜: (からかうように) そうだね。夏のパーティーを期待してたのに、出てきたのはこの
「詩的な堆肥」の山だったってわけだ!

ティン: (楽しそうに) おやおや、落ち着きのない君たち、宇宙のユーモアを見逃しているよ!
わからないのか? 堆肥でさえ踊っているんだ。その律動はすべての命を通して脈打っている。
私たちは文字通り、毎瞬、何十億もの美しい終わりを堪能している。始まりと同じくらい、
終わりのためにも陽気に踊ろうじゃないか。

- T Newfields (和訳: Ronpeiとsugurunyan)

開始: 2000年 名古屋市 完成: 2025年 静岡市